

港のたより



(一社) 寒地港湾技術研究センター
COLD REGION PORT AND HARBOR ENGINEERING RESEARCH CENTER



第11回みなとオアシス Sea 級グルメ全国大会 in もんべつ (提供: 網走開発建設部)

Contents

行事報告

第6回 CPC 講演会の開催 2

港湾ニュース

「みなとオアシスの集い in 紋別」および
「第11回みなとオアシス Sea 級グルメ全国大会 in もんべつ」開催 3
北海道命名150年 記念事業！インフラ歴史ツアー第1弾！！
～五感で感じよう！小樽の歴史～ 5
稚内港末広地区クルーズ船等対応施設供用式典について 6
「北海道マリナビジョン21コンテスト2017表彰式」について 8
平成30年度 寒地土木研究所一般公開開催報告 10
第10回「小樽港フィールド・ラーニング」(O.F.L.)の開催
～北海道築港史―廣井勇と北海道開拓～ 11
海外輸出実証実験への参加企業募集説明会を全道6カ所で開催 12

シリーズ

現代語訳 日本築港史(室蘭港) 13

お知らせ

第3回 CPC 交流セミナー開催のご案内(予告) 14
「ザ・シンポジウムみなと in 石狩」開催について(予告) 14

センター通信

メールアドレス登録のお願い 15
第2回 CPC 交流セミナー開催 15
助成事業報告 16
編集後記 20

vol. 126
2018.10.12

行事報告

第6回CPC講演会の開催

平成30年9月13日(木)に「第6回CPC講演会」を開催致しました。

今年の講演会テーマは「北海道産品の輸出促進について」とし、NPO法人マリネットワーク理事長・中央大学研究開発機構准教授(客員)・苫小牧漁業協同組合などとアドバイザーの片石温美氏に「北海道産品の海外展開について」と題して基調講演を行っていただきました。また、(一社)北海道国際流通機構代表理事 鳥取義之氏に「海外物流基盤の構築」と題して発表を行っていただきました。当センターからは自主研究の成果について、田中 淳次長、吉田 徹次長の2名が発表を行いました。

本講演会には9月6日に発生した「北海道胆振東部地震」対応等で急遽、欠席された方や現地応援に赴かれた方々がいらっしゃる中で、総勢50名の皆様にご

参加いただきました。

基調講演をいただいた片石先生をはじめ、鳥取代表理事並びにお忙しい中お集まりいただいた参加者の皆様に心から感謝申し上げます。



講演会の様子



NPO法人マリネットワーク 理事長 片石 温美氏



(一社)北海道国際流通機構 代表理事 鳥取 義之氏



(一社)寒地港湾技術研究センター 田中 淳次長



(一社)寒地港湾技術研究センター 吉田 徹次長

NEWS 港湾ニュース

■ 「みなとオアシスの集い in 紋別」 および 「第 11 回みなとオアシス Sea 級グルメ全国大会 in もんべつ」 開催

(一社) 寒地港湾技術研究センター

はじめに

8月24日(金)午後から26日(日)午後にかけて、紋別市において、「みなとオアシスの集い in 紋別(開会式の後、第10回みなとオアシス全国協議会総会、第24回みなとまちづくり研究会、交流会)」および「第11回みなとオアシス Sea 級グルメ全国大会 in もんべつ」が開催されましたので報告します。

みなとオアシスの集い in 紋別

(1)開会式

24日(金)14時から開会式が行われました。

はじめに、みなとオアシス全国協議会 会長 長澤宏昭氏、一般社団法人ウォーターフロント協会 会長 金澤 寛氏による主催者挨拶があり、次に来賓として国土交通省港湾局産業港湾課長 魚住 聡様をご挨拶

されました。

最後に宮川紋別市長が地元を代表して歓迎の挨拶を行いました。

(2)第 10 回みなとオアシス全国協議会総会

開会式終了後、総会が開催され、平成29年度事業報告、平成30年度事業計画および会則の改定について審議されました。

その後、報告事項として、次回(平成31年度 第12回)開催地について、開港150年を迎える新潟港等に配慮し、佐渡両津において、10月19・20日に開催されることが報告されました。

(3)第 24 回みなとまちづくり研究会

総会終了後、15時から第24回みなとまちづくり研



主催者挨拶
みなとオアシス全国協議会 長澤会長



主催者挨拶
(一社)ウォーターフロント協会 金澤会長



来賓挨拶
国土交通省港湾局 魚住産業港湾課長



歓迎挨拶
宮川紋別市長



みなとまちづくり研究会
パネルディスカッション



パネルディスカッションにおける
会場からの発言

究会が開催されました。

はじめに第1部としてみなとオアシスもんべつ 運営協議会代表 竹内珠己氏から「紋別の海・みなと」とのタイトルで、元来、アイヌが住んでいた北海道にどのような経緯で和人が渡ってきたのか、また、江戸時代以降における北海道及びオホーツク沿岸における海上交易の足跡等について講演が行われました。

第2部では「女性の視点から見た地域振興・地方創生に貢献するみなとまちづくり」とのテーマでパネルディスカッションが行われました。真田 仁氏(北海道開発局港湾空港部長)がコーディネーターとなり、パネリストとして立野了子氏(みなとまちづくり女性ネットワーク室蘭代表)、折谷久美子氏(みなとまちづくり女性ネットワーク函館代表)、岩本明子氏(稚内のみなとを考える女性ネットワーク代表)の三氏が参加し、みなとまちづくりの活動に関し、現状の取組および課題等について意見交換を行いました。パネリストからは女性ネットワークメンバーの減少等、切実な課題が報告されました。

中国からの参加者から「中国の港湾は経済活動に資するものとの認識であり、みなとまちづくりのような活動は行われていない」。また、韓国からの参加者からは「みなとまちづくりの活動はみなとに対する愛があるからではないか」等の発言がありました。

第11回みなとオアシス

Sea級グルメ全国大会 in もんべつ

翌25日(土)10時の開会式から26日(日)15時の表彰式まで紋別港港南地区において、「第11回みなとオアシス Sea級グルメ全国大会 in もんべつ」が開催されました。

道内における開催は平成25年7月(第3回大会)の苫小牧以来、2回目となります。

25日は台風20号の影響を受け、開会式終了後から雨が降る、あいにくの天気になりましたが、道内ははじめ全国各地から16店が出店し、各地の海の幸グルメを提供しました。

26日は天気も回復し、8,000人が来場しました。

出店者の中には台風を意識し、仕入れを控えるところもあり、午前中に完売する店が続出し、料理を提供する店には順番待ちの行列もできました。

来場者の投票による結果発表が26日15時から行われ、以下の結果となりました。

優勝：ホタテみそ焼きうどん

みなとオアシスもんべつ

準優勝：ほっきカレー

みなとオアシス苫小牧

第3位：じゃこカツ

みなとオアシス八幡浜みなと

連日の行事に参加された方、大変おつかれさまでした。



Sea級グルメ全国大会 in もんべつ 開会式



Sea級グルメ全国大会 in もんべつ 会場風景



優勝した「みなとオアシスもんべつ」

北海道命名 150 年 記念事業！インフラ歴史ツアー第 1 弾！！ ～五感で感じよう！小樽の歴史～

北海道開発局 小樽開発建設部 小樽港湾事務所

今年、平成 30 年(2018 年)は松浦武四郎が「北加伊道」を含む 6 つの名前を明治政府に提案し、それを基に「北海道」と命名されてから 150 年目の節目の年です。積み重ねてきた歴史や先人の偉業を振り返り、感謝し、道民・企業・団体などと一体となり、節目の年を祝うため、様々な取組を行っています。北海道開発局も「北海道みらい事業(北海道 150 年事業)」として、これまで私たちの暮らしや、北海道の産業を支えてきたインフラをより身近なものとして実感いただけるよう、インフラ整備の歴史をたどりながら、その効果を体感できる「インフラ歴史ツアー」を実施しました。

第 1 弾は、北海道の経済を支えた「小樽港」と鉄道「手宮線：明治 13 年(1880 年)～昭和 60 年(1985 年)」の歴史をたどるツアーです。

今から約 150 年前の明治初頭、小樽港は札幌に近いことから、北海道の内陸部と道外を結ぶ要地となりました。その後、我が国のエネルギー需要に対応するため、北海道の石炭の供給が国家的課題となり、幌内炭鉱(現在の三笠市)から小樽に至る鉄道と小樽港の整備が進められ、小樽港からの安定した石炭の積み出しが実現しました。手宮線は北海道で初めて開通した鉄道で、石炭輸送のみならず、旅客輸送でも活躍しています。物資流通の拠点として栄え、道内経済の中心地となった小樽には金融機関が集まり小樽銀行街が形成され、「北のウォール街」と呼ばれていました。

石炭の運搬から始まった鉄道の歴史と、当時、最新の技術で整備された小樽港北防波堤に代表される港湾

整備の歴史を学び、その後の海運業の発展がもたらした小樽の繁栄などを実感できるツアーとなっています。

「みなとの資料コーナー」見学

小樽運河を代表とする小樽港ですが、2 つの土木学会選奨土木遺産がある歴史的に古い港です。一つは、明治 30 年(1897 年)にコンクリートを用いた日本初の本格的な防波堤となる「北防波堤」であり、小樽築港事務所の初代所長である廣井勇の指揮の下、建設されたものです。もう一つが明治 45 年(1912 年)に竣工した「斜路式ケーソン製作ヤード」です。第 3 代目所長の伊藤長右衛門が、軍艦の進水を参考に滑り台方式でケーソンを進水させた世界初の施設であり、ケーソン技術の適応範囲を広げ、我が国の近代港湾の発展に貢献した施設です。

小樽港湾事務所から、これら土木遺産の紹介、港湾業務艇による港内見学により、小樽港の歴史や役割をガイドしました。

ツアーは、6 月 24 日、7 月 21 日、8 月 25 日の 3 回を開催、各回 20 人の募集でしたが、全て満員となりました。北防波堤を間近に見たり、海上から小樽港を見る機会も少ないことから、参加者からは好評の声をいただきました。また、追加ツアーとして、10 月 13 日には、「北海道を支えた土木インフラ事業の歴史道・港・川・そして農地」の開催が決定しております。

みなさんも小樽の歴史を五感で感じるため、ぜひ一度、小樽にお越しください。



■ 稚内港末広地区クルーズ船等 対応施設供用式典について

北海道開発局 稚内開発建設部

はじめに

日本最北の重要港湾である稚内港は、道北の流通拠点として、また、沿岸・沖合漁業の基地、さらには利尻島、礼文島及びロシア連邦サハリン州とを結ぶ交通結節点として重要な役割を担っています。近年は、サハリンプロジェクトの関連資材や船舶の中継港、さらに外国からの風力発電資材や生鮮魚介類の輸入港として利用されるなど、益々その役割の重要性が増しているところです。

事業概要

稚内港末広埠頭には水深 12m の岸壁がありますが、岸壁の延長が 240m しかないため、3 万トンを超える大型クルーズ船は接岸することができず、大型クルーズ船の寄港要請に対しては、これの受け入れができない状況となっていました。

また、稚内港にはサハリンプロジェクト関連の調査船・作業船が乗組員の交代や物資補給などのために多く寄港していますが、大型船の複数の接岸が困難な状況でした。

以上のような問題を抱えていた稚内港でしたが、地

元住民等の強い要望が実り、平成 28 年度から、最大 12 万トン級の大型クルーズ船の受入や、係留時の安全性や効率性の向上を目的とする整備に着手しました。整備は末広埠頭の既存岸壁を有効に活用する方針の下で行い、既存岸壁の沖側にクルーズ船等の係留ロープをとるための係船柱(ビット)2 基及び橋台を整備しました。また、既存岸壁上には、係船柱の新設や、舗装コンクリート打ち替えが完了しており、平成 30 年度中には、既存岸壁と各係船柱間を渡るための 3 基の連絡橋が完成します。

本施設の整備により、大型クルーズ船の接岸が可能となるのみならず、サハリンプロジェクト関連の調査船や作業船の複数の係留が可能となり、稚内港の利用機会の拡大が期待されます。

供用式典

平成 30 年 7 月 27 日(金)に、初めて本施設を利用するクルーズ船「飛鳥Ⅱ」の寄港に合わせ、稚内市および北海道開発局稚内開発建設部が主催者となり、供用式典を開催しました。式典には約 40 名が出席し、稚内市の工藤市長と、稚内開発建設部の和田部長が式辞を



係船柱(ビット)整備状況 (H30.7.3)

述べ、国土交通省北海道局成瀬港政課長の代読により、北海道局長の挨拶が行われました。これを受けて、来賓である武部衆議院議員からご祝辞をいただきました。

その後、富澤稚内港湾事務所長から「事業概要」の報告があり、最後に来賓や関係者によるテープカットが執り行われました。

おわりに

本施設は道北地域で初めて12万トン級の大型クルーズ船の入港が可能となり、日本の最北端に新たなクルーズ周遊ルートの拠点が生まれることが期待されています。稚内開発建設部としましては、周辺環境の保全と工事の安全に万全を期し、残りの連絡橋2基の早期完成を目指し、鋭意事業を進めて参ります。



供用式典におけるテープカット



■「北海道マリンビジョン 21 コンテスト 2017 表彰式」について

北海道開発局 農業水産部 水産課

平成 30 年 7 月 3 日に「北海道マリンビジョン 21 促進期成会」(以下、「期成会」という)の総会が関係者約 100 名の出席により札幌市内で開催され、総会に併せて、「北海道マリンビジョン 21 コンテスト 2017」の表彰式が行われましたので報告します。

各地域で策定された地域マリンビジョンの実現に貢献する優れた取組を表彰し、取組の更なる推進や他地域への活動の普及を図るため、期成会が主催し、当局の後援により「北海道マリンビジョン 21 コンテスト」を平成 20 年度から開催しています。

今回、第 10 回目となるコンテストでは、昨年度までの「総合部門」「個別取組部門」の表彰を、「最優良賞」「優良賞」「奨励賞」に見直して実施し、最優良賞は寿都地域マリンビジョン協議会、優良賞は砂原地域マリンビジョン協議会、積丹地域マリンビジョン協議会、根室地域(歯舞地区)マリンビジョン協議会及び雄武地域マリンビジョン協議会、奨励賞は松前江良地域マリンビジョン協議会及び遠別地域マリンビジョン協議会が受賞し、それぞれ関係者に表彰状が授与されました。

受賞した取組の概要は以下のとおりです。

寿都地域【最優良賞】

寿都産かきを「ことぶき寿かき」として商標登録し、ポスター作成により知名度向上を図る等のブランド力の強化と販路拡大の取組を実施するとともに、鮮度保持の効果と付加価値を高めるため、秋サケやヒラメなどの活メ技術を向上させる取組や、海水シャーベット水施設を整備しました。

また、平成 29 年 6 月 3 日にオープンした「そば処 鯉御殿」は漁で栄えた時代を象徴する歴史的建造物「鯉御殿」の土蔵を改修したものであり、寿都産の魚介類や野菜を使用した料理を提供し、寿都の歴史を感じながらまちの魅力発信や交流人口の拡大に繋げる取組です。

さらに、年間 300 万人の観光客が訪れるニセコ地域にて、寿都町の魅力を発信することを目的として、レストランと鮮魚ショップを併設した「寿都アンテナショップ神楽」を平成 29 年 11 月 11 日にニセコ町に開設しました。地元ニセコ地域の人々に加え、国内外の観光客から広く利用されており、交流人口の拡大や水

産物のブランド化などへの波及効果が期待されます。

これらの取組は、水産業の振興と地域経済の活性化の取組として、先駆的・独創的であり、他地域マリンビジョンへのモデルとなる総合的な取組であることが高く評価されました。



最優良賞の表彰状授与の様子

砂原地域【優良賞】

平成 23 年度から漁協女性部が地元の昆布とホタテを用いて開発・販売した「ほたて昆布きんちゃく」は、平成 28 年度に北海道が認定する「北のハイグレード食品+」に認定されたことにより、パッケージデザインや正味数量の変更を条件にバイヤーからの引き合いを受け、多角的に検討を行い、販路拡大や新たな商品開発が期待されています。

漁協女性部によるこれらの取組は、未利用資源の有効活用や付加価値化等、地域水産物のブランド化や消費拡大の取組として高く評価されました。

積丹地域【優良賞】

「さくらます祭り」は、早春の漁業資源であるサクラマスを活用し、夏季に限定的となっている観光シーズンの長期化を図るとともに、保護水面河川「余別川」で実施している種苗放流や森林保全活動を町内外に伝えることを目的に実施しました。

サクラマスの保護水面についての講演のほか、稚魚の放流、サクラマス料理の試食等を実施し、イベント当日は町内外からの来場者で賑わいをみせ、稚魚放流や、余別川流域の散策、若手漁業者によるサクラマス

料理の提供により、来場者は「学び」と「食」の両方で余別地区の自然を楽しみました。

これらの取組は、春の観光資源としてのサクラマス
の認知度向上を図るとともに、環境保全の重要性を伝える取組として高く評価されました。

根室地域(歯舞地区)【優良賞】

都市との交流・賑わいのある漁村地域づくりを目的に、地場産水産物のブランド化や各種イベント、遊覧船による周遊観光の他、各種体験学習や漁業者宅へのホームステイを積極的に実施するとともに、旅行会社や北方領土県民会議等に出向き、歯舞地域民泊・観光の誘致を行い、訪れた観光客や学生に対し、漁業体験や民泊を提供しています。

また、歯舞漁協関係者が、各地で開催されている農泊や観光シンポジウムに講師として当地区の取組について講演し、農泊(渚泊)の推進を図っています。さらに、農泊事業に取り組んでいる他地域を視察することで、当地域での新たな取組を模索し、さらなる誘致活動の拡大を図っています。

これらの取組は、道内における農泊(渚泊)の先駆的な取組であるとともに、地域資源を生かした新たな産業の創出が期待される取組として高く評価されました。

雄武地域【優良賞】

養殖昆布の越冬やウニの増殖等に利用されている元稲府漁港内の静穏域の更なる有効活用を図るため、ナマコ増殖用施設を設置して、稚ナマコを放流し、育成環境の調査を行いました。また、外海に近い環境での調査を行うため、西外防波堤背後の水面を活用した養殖調査も実施しました。

元稲府漁港内の静穏水域の天然ナマコに加え、昨年度から西外防波堤付近に調査範囲を広げ、親ナマコを放流することにより、より効果的な資源増大が期待されています。

これらの取組は、漁港水面を有効活用し、資源の維持・増大に結びつく取組として高く評価されました。

松前江良地域【奨励賞】

江良漁港では、江良蓄養施設管理委員会や松前さくら漁協の蓄養部会が中心となり、アワビ養殖、ホッケ蓄養、ウニ蓄養の試験を行っています。

これらの取組は、漁業者収入の増加につながるものとして期待されるものの、試験段階の取組として多く

の課題も抱えています。このため、関係者が一体となり支援することで発展や持続性が期待される取組として評価されました。

遠別地域【奨励賞】

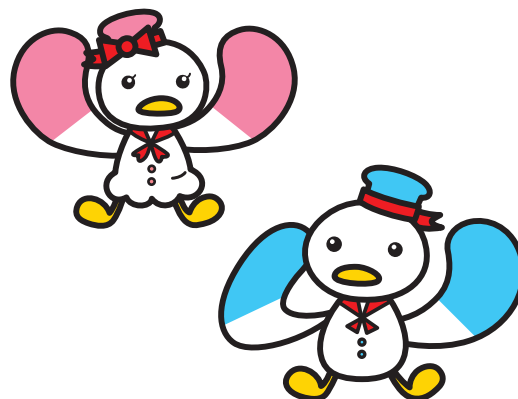
遠別地域では、漁協青年部、商工青年部、農協青年部、遠別町役場組合青年部が「単独ではなく各産業が連携することで、今までにない活動ができないか」という観点で、「青年部連携地域活性化実行委員会」を設立し、地域活性化の取組を開始しました。

平成29年8月19日の仮装行灯パレード・仮装盆踊り大会にて、初の取組として、漁協、農協、商工会の各青年部が連携し、水産業などの地元産業のPRも兼ねてビアガーデンを開催するなど、若者交流事業を行い活動しています。

これらの取組は、水産業など地元産業の振興や地域活性化が大いに期待されるものであり、関係者の一層の連携により発展や持続性が期待される取組として評価されました。



優良賞の表彰状授与の様子



平成 30 年度 寒地土木研究所一般公開開催報告

国立研究開発法人 寒地土木研究所 寒冷沿岸域チーム
水産土木チーム

平成 30 年度寒地土木研究所の一般公開を 7 月 13 日(金)・14 日(土)の 2 日間にわたり開催しました。13 日(金)は雨時々曇りのあいにくの天気でしたが翌土曜日は晴れ、2 日間で 1,353 人のお客さまにご来場いただきました。今年も各研究チーム・研究ユニットが工夫を凝らした研究内容の紹介により、子供達だけでなく大人の皆様方にも、それぞれのコーナーで実験・体験・発見を楽しんでいただきました。

寒冷沿岸域チームでは「いろんな波と流水を学ぼう！」をテーマに、手動の津波発生模型による実験体験、風洞水路を用いた風波の観察、オホーツク海で採取した本物の流水展示、そして流水津波シミュレーションの映像展示などを行いました。津波発生模型のコーナーは子供達も興味津々で、この体験を通して津波への理解を深めていただけました。流水の展示コーナーでは、直接流水に触れる貴重な体験ができたこと、皆さん大変喜んでおられました。また、流水津波シミュレーションの映像展示には多くの方々が関心を寄せられ、流水津波の発生とその危険性について、具体的に知っていただくことができました。



水産土木チームでは「さわって・見て・学ぼう『北の海の生きものたち!!』」と題して、ウニやナマコ、ホッキガイなど、当チームが研究対象としてきた北海道沿岸域に生息する海洋生物を集めたタッチプールを設けました。普段、生きた海洋生物に直接触れることが少ない子供達にとって貴重な経験であり大人気でした。さらに、振動流実験水路や港内の水質・底質の浄化が期待されるホタテ貝殻礁の展示、これまで行ってきた研究成果を取りまとめたビデオ放映を行いました。来場者の方々には展示物を興味深く見ていただき、理解を深めていただけました。

来年も多くの皆様のご来場をお待ちしております。



津波を発生させることのできる模型コーナー



本物の流水に触れることのできるブースは大人気



水産土木関係の展示物を興味深く見る来場者たち



海洋生物を直接触れるタッチプールは子供たちに大人気

■ 第10回「小樽港フィールド・ラーニング」(O.F.L.)の開催 ～北海道築港史―廣井勇と北海道開拓～

北海道開発局 小樽開発建設部 小樽港湾事務所

小樽港は日本近代築港の原点であり、将来の人口や地域の生産量の予測に基づく移出量の推定、他のインフラ整備に呼応した投資の必要性などの計画的観点、耐海水性コンクリートの製作、波に粘り強い防波堤構造などの技術的観点は、今なお港湾整備の根幹です。

このため、小樽築港事務所初代所長である廣井勇博士による工学の考え方と人間廣井勇を育てた時代背景及び歴史的史実等を学ぶことにより、港湾技術者としての意識、技術、知識、港湾を含む社会資本整備の計画及び説明力等の技術力向上を図ることを目的に「小樽港フィールド・ラーニング」を開催しております。

「小樽港フィールド・ラーニング」は、小樽港(Otaru)で実物を見ながら(Field)、習得(Learning)との意味で平成23年度から開催、7月17日に第10回を開催、北海道開発局職員、建設会社、コンサルタントなどの関係者約60人が参加しました。

平成28年の第6回から、日本データサービス(株)(7月17日当時)顧問・北海学園大学院非常勤講師の関口信一郎氏により「北海道開発の歴史～廣井勇博士の生涯」をテーマに連続シリーズとして開催しております。今回は「北海道築港史―廣井勇と北海道開拓」と題し、北海道における近代築港学の発展と我が国の近代港湾工学の確立・発展への貢献についてご講演いただきました。

講演は、「廣井勇博士が完全に移植した近代築港学は、小樽港北防波堤の建設以後、北海道開拓に不可欠な港の計画および建設に理論的・実務的基礎を与え事業を牽引して十分な成果を収めていきました。それと同時に近代築港学そのものも種々な自然条件の現場で展開されることにより発展していきました。全国の港湾工事においても、小樽港北防波堤建設以後に外洋に臨んで新たに港湾を計画し建設していったフィールドは、ほとんどが北海道です。実務を行ったのは廣井博士の教え子たちであり、常に顧問としての廣井博士の指導がありました。したがって北海道の築港を語ることは近代築港学の発展過程を語ることでもあります。その築港の進展が、とりもなおさず我が国の近代港湾工学の確立・発展に貢献したとみて誤りありません。北海道命名150年を迎えた今日、上記の観点から北海道開拓における築港の歴史を述べることは意義があることと考えます」との内容で、北海道内の各港における廣井勇博士の功績についてまとめていただきました。

なお、第11回を今年11月頃に開催を予定しております。



海外輸出実証実験への参加企業募集説明会を全道6カ所で開催

北海道開発局 港湾空港部 港湾計画課

今年度、北海道開発局では、道産食品の今後の輸出促進方策の検討のため、昨年6月に連携協定を締結した一般社団法人北海道国際流通機構(以下、HIDO)の協力の下、海外輸出の実証実験を行います。本実験へ参加する企業を募集するための説明会を6月20日から7月6日にかけて全道6カ所で開催しました。

実証実験では、苫小牧港から台湾・韓国へ海上小口混載コンテナによる輸出を行います。説明会にて集まった商品に現地消費者のニーズに合わせた改良(パッケージデザインや内容量等の変更)を実施し、海外現地の百貨店等で比較販売をする予定です。

北海道開発局では、北海道総合開発計画における道産食品輸出額1,500億円(平成37年)の実現に向けて、「北海道国際輸送プラットホーム(通称:HOP)」や「農水産物輸出促進基盤整備事業による屋根付き岸壁の整備」など、輸出拡大に向けた取組を行ってきました。

しかし、道産品の輸出については、高額な輸送コス

トや通関による厳しい輸入規制、海外現地における嗜好の把握が難しいこと等、誰でも簡単に輸出できる環境が整っておらず、多くの課題を抱えている状況です。

本実験の協力企業であるHIDOでは、すでに海外で事業を展開している企業を社員として招き入れ、現地消費者の購買ニーズ等の海外の最新情報を得ています。これらのニーズを取り入れた改良商品を台湾・韓国にて販売し効果を検証する予定です。

説明会には全会場合わせて85名の参加があり、参加者からは「現地ニーズの情報を得られるのは中小企業にとってもありがたいこと」、「過去に輸出事務で苦労した経験もあり、こういった説明会はありがたい」などのご意見をいただきました。

実験の結果は、道内の輸出に取り組む企業の視野を広げるため、輸出実績の無い企業も安心して輸出できるような方策を検討するための情報として活用します。



全道説明会を開催



鳥取氏(HIDO代表理事)による講演



7月6日 説明会(札幌会場)の様子



温暖化などの地球規模の気候・環境変動が言われはじめてから久しいですが、今年2018年の我が国の夏はかつてない猛暑でした。全国各地で軒並み40℃

を超える気温を記録して「観測史上初」などという仰々しいニュースが連日報道され、熱中症に罹る方々が続出しました（気温だけでいえば我が北海道だけは蚊帳の外、といった感じでしたが…）。また、7月上旬には広島を中心に台風に伴う豪雨被害、9月6日には北海道胆振地方中東部を震源とする震度7の大地震、といった大きな自然災害が発生したことはご存じのとおりです。

気温40℃で驚いていたところ、ヨーロッパでは8月に強烈な熱波が襲来し、スペインではなんと46℃越えを記録したとのこと。その一方で、イタリアのナポリでは2018年2月に50年ぶり的大雪を記録するなど大寒波に見舞われたばかり。温暖化だから熱波、といった単純な構図ではなく、熱波・寒波・大洪水・大地震など自然現象の振幅が大きくなってきているのだと思います。

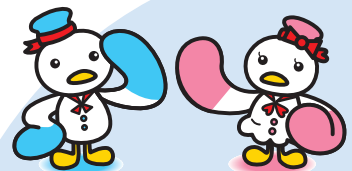
私は水産分野の研究に従事していますが、じつは温暖化とは大いに関係があります。最近では温暖化で海水温が長期的に上昇し続けていると言われており、それが水産業における漁獲に影響をおよぼしています。水産白書によれば近年は我が国では北海道付近まで海水温上昇の影響がおよび、冷たい海水を好むサンマが捕れなくなったり、逆に暖かい海水を

好むブリが多く捕れだしたりといった現象が起っています。ブリは元々は北海道に馴染みのない魚ですが、私の研究フィールドである北海道利尻島の漁師さんに聞いた話では、最近は島でもやたらブリが捕れている、ということを書いていました。その一方で、ブリの名産地である富山県では、冬の味覚として有名な「寒ブリ」の不漁に悩んでいるとのこと。

ある研究者によれば、過去50年間で地球上の海水の温度が平均で「0.037℃」上昇したとのこと。一見僅かな数字ですが、地球の全ての海水を0.037℃温めるのに必要な熱量は気温をなんと約40℃も上昇させるそうです。要するに海が大気中の熱を吸収することで気温上昇を抑えるクッションの役割をしてくれていて、そのおかげで破滅的な気温上昇に至らずに地球が温暖化に耐えていられる、というわけです。とはいえ、海の熱の吸収量もここにきてかなり積み上がってきており、その膨大なエネルギーが強烈な台風などの発生要因ではとの推測もあることから、危険水域に近づいているとの研究者の警告もあります。

いずれにせよ、私たちは地球の自然環境があつて初めて生きることができます。海水温の上昇などは、静かではありますが地球が発する悲鳴と捉えることもできます。私たちが海を含めた地球環境に積極的に関わっていこうとする思いが必要なときかもしれません。私も海の仕事に携わる者のひとりとして、いつまでも海からの恩恵を受け続けることを願っていますし、そのために可能な限り貢献できればと思っています。この会報「港のたより」を通して、少しでも多くの方々に海への関心を持っていただくことができれば幸いに思います。

(K.S)



港のたより VOL.126

2018年10月12日
(一社)寒地港湾技術研究センター
〒001-0011
札幌市北区北11条西2丁目2番17号
セントラル札幌ビル5階
TEL(011)747-1688
FAX(011)747-0146
<http://www.kanchi.or.jp>

(お詫び)

台風21号および北海道胆振東部地震により被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

当センターも地震による停電の影響で9月6、7日と業務を停止させていただきました。皆様にご迷惑をおかけ致しましたこととお詫び申し上げます。